

い、妨げないことが要点である。言いかえれば非言語水準の発達段階とその援助である。もっぱら学習に依存する言語学習や技能訓練をこの時期に導入することは、非言語水準の発達過程をすつ飛ばすことになり、結果として、育児因性の発達障害者を作ることになるであろう。人間として成長する以前に、あるいは基盤として、動物たるヒトとしての資質が十分に発育することが必要である

スティーン・E・ガットスティーン著 (足立佳美監訳、坂本輝世訳)

自閉症/アスペルガー症候群 『RDI「対人関係発達指導法」』 対人関係のバズルを解く発達支援プログラム

話しことばの発達そのものに表面的には明瞭な遅れを認めない、高機能自閉症あるいはアスペルガー障害の存在に光が当てられるようになるにつれ、自閉症の中核的問題として、これまでの言語認知障害に代わって社会性の障害に再び注目が集まりつつある。驚くほどに話し言葉を用いることができるにもかかわらず、他者の気持ちや意図などをつかめないというコミュニケーションの

う。動物としての資質の十分な開花は、個体が親獣となった際に重要である。親子関係をめぐる昨今の奇怪な事件は、早期知育教育に由来する、ヒト獣としての未発達な親獣がもたらした悲劇なのかもしれない。これから親となる人間に本書を薦めたい。自他の内なるヒトに思いを向けて貰いたいから。

神田橋條治
(かんだはし・じょうじ/伊敷病院)

ギャップは、コミュニケーションの成り立ちを考えるうえで、話しことばの生まれる前段階での対人関係の発達理解の重要性を改めて再認識させることになった。

そのような動向の中で生まれたのが、本書で提唱されている「対人関係発達指導法」(Relationship Development Intervention: RDI)である。この治療教育プログラムは、対人関係の発達を段階的にきめ

こまかく評価し、それに沿って対人関係の発達を支援していこうというものである。

乳児と養育者との微笑み合うという萌芽的な対人関係はその後、良好な情動調律を通して深化し、愛着関係の成立へと進んでいく。その後、乳児は養育者を安全基地としながら、身の回りのさまざまな事物や事象への関心を強め、その意味を主に養育者との交流を通して理解できるようにになっていく。ここで重要な役割を果たす社会的参照(ソーシャル・レフアレンシング)行動が自閉症やアスペルガー障害の人々ではきわめて乏しい。彼らは他者との間で情動が響き合うような関係をもつたり、ある対象への興味や関心をはかち合ったりするということがきわめて困難である。このような対人関係の発達の初期段階の問題が、その後日常生活で体験するあらゆる事象の文化的意味を獲得することを困難にするとともに、対人関係の広がりや難しくする。

RDIでは、さまざまな発達段階での経験を他者と共有することの喜びを感じ取れるようになることに力

点が置かれ、最終的にはこころから喜びを分かち合える交友関係をもてるようになることを目標にした発達支援が行われている。

その理論的基盤には、従来の認知障害はもちろんのこと、感情の情報処理能力の障害(ホブソン)、共同注意の障害(マンディ)、さらには「心の理論」障害(バロン・コーエン)などを広範に取り入れ、実際の療育においてもTEACCHの構造化、行動変容、サーツモデル(ブリザント)などの技法を適宜応用しながらも、基本には対人関係の発達に焦点化した療育プログラムであるという。

対人関係の発達段階は大きく六つのステップ(人間関係の基礎をつくる↓大人の行為を見習いはじめる↓パートナーとして共に活動する↓この世界を共有する↓心を分かちあう↓本当の友達になる)に分類され、



クリエイツもがわ、2006年
本体3000円

各々のステップはさらにきめこまかく分けられ、計二四段階を構成している(現在も改良が加えられて、今では二八段階になっているという)。

対人関係の発達支援と似て非なるものだとわがざるをえない。個体側の能力障害が言語認知障害から対人関係発達の障害に置き換わっただけ

うな手だてを考え、指導や援助を行うという基本的な考え方である。子どもたちのこころの発達を考えた時、課題に沿って何かをさせるとい

こころの発達をみた時に、もつとも中核にある深刻な問題として、自分の意思で自発的に行動を起こすというこの困難さを評者は重視してい

用いることができるにもかかわらず、他者の気持ちや意図などをつかめないというコミュニケーションの

Development Intervention: RDI) である。この治療教育プログラム

RDIでは、さまざまな発達段階での経験を他者と共有することの喜



クリエイツかもが 本体3000円

各々のステップはさらにきめこまかく分けられ、計二四段階を構成している（現在も改良が加えられて、今では二八段階になっているという）。

役立ちそうな理論や実践であれば積極的に取り入れながらも、対人関係の発達支援に焦点を当てているという意味では、本書の帯に示されているような「自閉症治療の新たな地平を拓く画期的プログラム」と言えるのかもしれない。

しかし、評者にはいくつか疑問が浮かんでくる。第一に、本書で問題とされているのは対人関係の発達であるという点である。そもそも発達理解や発達の援助になぜ「関係（性）」が取り上げられるようになったかと言えば、本来人間は常に他者（あるいは環境）との関係の中で発達していくものであるという（ある意味では至極当然の）視点がこれまでの発達（障碍）理解にほとんど反映されていないという重要な問題提起からであった。われわれかわる者の存在を抜きに子どもを理解することはできないのだという重い問題提起でもある。その意味で関係発達（臨床）はRDIで焦点化されてい

る対人関係の発達支援と似て非なるものだといわざるをえない。個体側の能力障碍が言語認知障碍から対人関係発達の障碍に置き換わっただけのようにさえ見えてしまう。

第二に、愛着に関する問題についてである。乳児期の対人関係の重要性を力説しているにもかかわらず、愛着に関する問題についてはほとんど触れられていない。自閉症の子どもたちは愛着、つまりは甘えの世界で非常に繊細な反応を見せていることを日々の臨床で痛感している評者は、自閉症にみられる対人関係障碍の内実に肉薄していくためには、この点を避けて通ることはできないのではないかと考えているが、「甘えの構造」の土居がいみじくも指摘したように、甘え文化に身を置くわれわれ日本人にしかこの世界は見えないのかもしれない。

最後に、なんらかの療育プログラムに沿って指導や援助を行うという枠組みについてである。RDIに限らず、学習理論に基づく療育プログラムに一貫して流れているのは、子どもの側になんらかの（能力）障碍を見出し、その能力を獲得できるよ

うな手だてを考え、指導や援助を行うという基本的な考え方である。子どもたちのこころの発達を考えた時、課題に沿って何かをさせるという、基本的なスタンスのもたらず影響をどう考えるかという問題である。子どもたちのこころ（気持ち）の動きを丁寧に取り上げないで、対人関係の基本が形作られていくものであろうかとも思う。

広汎性発達障碍の人々の成長後の

テンブル・グランデンほか著（中尾ゆかり訳）

『動物感覚』

アニマル・マインドを読み解く

テンブル・グランデンは、この雑誌の読者には周知のように、動物学者として活躍する高機能自閉症者である。この本は、原題を "Animals in translation" という。彼女が自閉症者としての特性をフルに活かし、動物の心のあり方を解説した本であり、おそらく動物精神医学の専門書として、日本語で出版された最初の本である。筆者はこの本によって animal psychiatry 動物精神医学とい

う領域が成立することを初めて学んだ。

もちろんこれまでも類書は書かれていた。たとえばローレンツによる『ソロモンの指環―動物行動学入門』（早川書房）は、今読み返しても優れた内容の啓発書である。しかしそれらの本は、動物の行動観察から導き出された知識が中心となり、動物がどう考えるか、どのように感じるかという、動物の体験世界に関